
百獣の王

羽毛蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百獣の王

【Nコード】

N3875BA

【作者名】

羽毛蛇

【あらすじ】

世界中の生き物を見て回りたい。そんな夢を持った日本人が「ONE PIECE」の世界に転生し、主人公一行と「自分だけの生物図鑑」を作る為に旅に出ます。

作者の初投稿作品になりますので、ツツコミどころが多々あるかもしれませんが一読しただけでお願いします。

プロローグ（前書き）

はじめまして。作者の「羽毛蛇」です。

投稿は始めてですが、よろしくお願いします。

ブローグ

「コケコッコゝー!!」

「……んあ？」

目覚めるとそこは見知らぬ砂浜でした。

………はいいつ？

いやいやいや、ここ何処？マジで？

いや、落ち着け、まずは現状確認だ。俺は「藍沢^{あいざわ}匠^{たくみ}」中洲のNO.1
ホストだ。酒に飲まれるなんて俺らしくもねえ。

……あれ？………あつるえゝ？本名が思い出せん。

やべえな。相当酔っ払ってるみたいだけど、別に二日酔いって訳でもなさそうだ。一時的な記憶障害か？世界中の生き物を見て廻る為の資金集めでホストなんかやってんだから、記憶障害になるまで飲むなんて馬鹿らしい。まあ、酒は好きだけど。

てかここは本当に何処なんだ？百地浜？……百地にこんな森はないな。ていうか俺は泳げないから海には近づかん。

まあ、じっとしていてもしょうがないし、どっか見覚えのある場所まで歩くか。流石に酔っ払って福岡から脱出してることは無いだろ

うし。

「コケコツコッ!」

さて、歩き始めて1時間。

海です。ただひたすらに海です。

なんで？海岸沿いに1時間も歩き回って左手に海、右手に森。こんな場所はしらん。ていうか森っていうよりジャングル（？）に見えてきた。なんかジャングル（笑）から鶏の声聴こえてるのも意味不明だし、ちよつと見にいつてみるか。鶏かわいいしね。

.....

結論から言おう。こんな鶏はいねえ!!

鶏冠があるし尾は鶏なんだが、体は何故か狸っぽかった。

UMAを発見したので取り敢えず捕獲。携帯で写メろうとしたんだけど、なんか携帯もなかった。この時点で俺は現状を夢だと断定した。何があっても商売道具の携帯を手放す訳が無い。

だから兎みたいな蛇がいても、ライオンみたいな豚がいてもしょうがない。スルーライフを決めこんだ。

・・・でも、この変な生き物を何処かで見たことがある気がする。
大好きな漫画で。某ハンター漫画だったか？

そんな事を考えながらポケットからタバコを探していると、

「それ以上踏み込むな！！」

何処からか、ていつか箱からモジャンボが生えてる（笑）辺りから
声がした。

ああ「ガイモン」だ。という事はこの夢は「ONE PIECE」
か。「ONE PIECE」は2番目に好きな漫画なので暫く夢を
観てるのもイイかな？

「くらあ！！無視すんな！！さつきからポケットとしやがって！早く
そいつを放せ！！」

「そいつ？」

「お前が抱えてる鶏だよ！！！！放さなければ貴様は森の裁きを受け
その身を滅ぼす事になるのか？」

やっぱ疑問系なんだ（笑）そんな事いわれても夢の中でしか触れな

い不思議生物なんだから、そう簡単には手放せない。それにこいつはどちらかというと鶏っぽい狸だ。あれ？そういえば夢の中なのになんでモフモフ感を感じられるんだ？

「だから無視すんなって！！もういい！森の裁きを受けろ！！」

ズドン！！

「・・・つてえ？」

なんだこの痛み？チリチリと焼ける様な痛みがする頬を撫でると、手には真紅の血。

その生温い鮮血と徐々に麻痺していく頬の痛みは余りにもリアルで俺は本当に「ONE PIECE」の世界に来て仕舞ったんだと唐突に理解した。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？ってまだ原作と絡んでませんけどね（笑）

小説って難しいですね。ご指摘・ご感想がございましたら、遠慮無くお願いします。

どんなにけなされようが最後まで投稿します。作者はしつこいし暇なので。

珍獣島（仮）でマシオカで叫ぶ（前書き）

地の分が多いですが主人公の過去なので多めに見てください。

珍獣島（仮）でマシオカで叫ぶ

「やった――――――――――」
「！！！！」

「うおっ！お・・・お前なんだ！！！！いきなりどうした？Mか？Mなのか？」

俺は間違いなく「ONE PIECE」の世界にやってきた。それを理解した1番素直な気持ちだった。

だって「ONE PIECE」だぞ！？珍獣だらけじゃん！碌な遊び道具も与えられず英才教育だかなんだか知らんが物心ついた時から勉強ばかりさせられていた俺にとって百科事典に載っていた動物たちの挿絵を見るのは唯一の楽しみだった。

いつか自分の目でこいつらを見てみたい。夢の中での俺は世界中の動物たちと友達だった。幼稚園のお受験には初歩的な動物たちの知識も必要だったからだろうか、両親は百科事典じゃない動物だけの図鑑も頼めば買ってくれた。勉強は好きだったからそんな感じで俺はいい子ちゃんに育った。

小学校5年生の時、宿泊学習に友達が漫画を持ってきた。某ハンターが主人公のその漫画は俺の心を揺さぶった。衝撃だったんだ。欲しいものを自由に追い求めるその職業が。俺は将来ハンターになる。

そんな子供らしい夢を持った。

家に帰って両親にその話をする・・・キレた。それも烈火のごとく。

そして俺は愚れた。こちらも烈火のごとく。「健全な精神は、強靱な(?) 肉体に宿る」とか言って俺に空手と柔道、ついでにサバットまで習わせていたくせにメタボだった親父は小学5年生にそりやあもうあっさりと負けた。

表面上は和解したが親父の関心が2つ下の弟に移ったのをいいことに俺は本格的にハンターになる準備を始めた。あの一件以来俺の頼みを大概聞いてくれる親父に頼んでネット環境を整え、知識を吸収した。中学3年になる頃にはさすがにハンターになるうとは思ってはいなかったが、それでも世界の生き物を見て回することは夢見ていた。

高校を卒業すると同時に家から放り出され、自分で生きていくことになった。マンションの1か月分の家賃しか払われてなかったのであわてて仕事を探していたらホストクラブの店長に声をかけられ月締め即給というその店のシステムに引かれて入店した。

まあ結果を言えば天職だった。入店一ヶ月でNo.1になりそれから6年その地位を守り続けて稼ぎまくった。少々贅沢をしても遊んで暮らせるお金はとくにあったのだが、俺は世界を旅するつもりなのでまだまだ稼ぐつもりだった。

いきなりこの世界に飛ばされてお金は無駄になったが、この世界には元の世界じゃ考えられないような珍獣がわんさかいる。楽しみでしようがない。

「聞けえー！ー！！頼むから話を聞いてくれ（泣）」

どうやら俺が長い回想に浸っている間、ガイモンさんはずっと俺に話しかけ、もとい叫んでいたらしい。悪いことをしてしまった。

「いやあ、すみません。この島にこれたのがうれしくて」

「なに！？お前はそんな小さななりで海賊か？いや、鶏を放さねえ所を見ると密猟者か！？」

だからこいつは狸だつてのに、いや1回もツツこんでなかったか。それはいいとして小さななり？俺は24歳、身長は186cmだぞ？小さくはないだろ？まあこの世界では身長3Mとかの人間がいるからでかくはないだろうが、そういえば俺の声がずいぶん高く感じるし視線が低い。

?????・・・いやな予感しかしねえ。

「おじさん鏡もってる？この子放してあげるから貸して？」

「鏡？ほれ。ちゃんとそいつ放せよ！」

ガイモンさんが鏡を放ってよこす。要求しといてなんだがガイモンさんが普通に鏡を持ち歩いてることに驚いたがこの際それはスルーだ。えらくかわいらしいデザインにも驚いた（若干引いた）がそれもスルーだ。俺のスルースキルは割りと高い。

恐る恐る鏡を覗き込み愕然とする。

「誰だお前!？」

不意に思い出す。俺はバースデイイベントであまりに飲みすぎて急アルで倒れたんだ。意識はあった。呼吸が止まっていくのもなんとなくわかった。

「ああ、俺、死んだんだ」

どうやら俺は異世界漂流者ではなく、異世界転生者だったようだ。

ガイモンさんといっしょ（前書き）

ガイモンさんとの生活です。

ガイモンさんといっしょ

というわけで俺は転生者だったようです。ちなみに転生してから浜で起き上がるまでの記憶はありません。ですが一緒に打ち上げられていたっぽいカバンの中にはかなり上質な紙（この世界では貴重なものらしい）で出来た分厚い動物図鑑、サバイバルナイフ、釣竿、キャンプ用品、手帳に筆記用具。さらには見た目7歳程度なのになり鍛えられた身体。おそらくこの世界で幼き頃の夢、ハンターを目指していたのでしょう。さすが俺！ブレが無い！！

ガイモンさんによるとこの近海を昨夜大嵐が襲ったらしいので、それでこの島に流れ着いたのだらう。まあ俺のことだから最初からこの島を目指していた可能性もあるが。

あ、俺の容姿を説明するとデビルメイクライのダンテだね。小さいけど。銀髪です。目まで灰色でした。何故でしょう？？まあイケメンなので許す！！元の世界でも顔はそこそこよかったのであまり感動は無いがダンテは好きなキャラクターなのでそこはかとなく嬉しい。

必要最低限の事しかガイモンさんと話さず考え込んでいたり俺を最初は不審がっていたが狸（ここは譲れない）を開放したことと動物談義をしたことによつて今は仲良くなった。もはや親友だ！ガイモンさん今まで珍獣島を守ってくれてありがとう・・・（泣）この島にいる間は手伝うよ！！

Side ガイモン

可笑しなやつだ。

最初は海賊か密猟者かと思った。大海賊時代は子供に残酷だ。俺のいた一味みたいに気のいいヤツ等ばかりじゃねエ！海賊に親を殺された孤児なんて五万といる。そんなヤツ等が海賊になることなんて別に珍しい事でもねえ。だが、どうやらこいつは違うようだこいつの鞆の中身を見たときはやっぱり密猟者じゃねえかと思ったが、味の記録の為に一匹仕留める以外、必要以上には狩らないらしい。

どうやら生き物のすべてに興味があるらしく、姿や生態、食用時の味まで記録した動物図鑑を作るのが子供の頃からの夢だそうだ。今でも十分に子供だと思っただがそのことを聞くとはぐらかされた。

アイザワ・タクミという名前とハンター（駆け出しらしい）という職業だった事以外はほとんど覚えてないらしい。暫くこの島の調査をしたいと言い出したのでこいつの眼を見据えると真っ直ぐないい眼をしてやがった。2つ返事で了承してやると、

「俺たちは親友だ！！！」

なんて、こっぴどかしいことを言いながら抱きついてきやがった。

可笑しなヤツだ。

Side Out

ガイモンとこの島で暮らし始めて2ヶ月が経った。島の動物たちの調査はあらかた終わり、今は釣りでその日の食料を確保しながら魚類の調査と、この世界の植物の知識をガイモンに学んでいる。まあガイモンにわかるのは喰えるか喰えないかぐらいのもんだが・・・

二人で生活するうちにガイモンは俺の料理の腕を気に入ってくれたようだ。俺は料理にはちよっと自信がある。世界を旅するためにはとサバイバル技術を元の世界で学んでいた頃、まずい飯は食いたくないと思つてサバイバル料理術を独自に学んだ。

仕事が休みの日は山奥の自然地にキャンプに行ったりして訓練をしていたので、レストランの厨房に慣れているサンジには負けなつもりだ。まあ作れるのは所謂The男飯だけなのだが・・・

ちなみに空の宝箱は確認済み。ガイモンはちよっと悲しそうだったけど原作ほど号泣はしていなかった。まあその理由はガイモンがこの島にいる期間がまだ3年だという事が大きいだろう。俺は暫くしたらこの島を出るつもりなのでガイモンも一緒に来ないかと誘ったのだが、

「森の番人を続けてエんだ」

と、原作どうりのことを言っていた。3年で自分の生涯をかけて守

っていくほどの情を抱くなんてやっぱりガイモンはいいヤツだ。

悪魔の実（前書き）

主人公には能力者になってもらいます。

悪魔の実

そんなこんなで日々を過ごしながらそろそろイカダでも作ろうかななんて考えていたある日、

「お〜い・・・タクミ〜！珍しい果物を見つけたんだ！食ってみねエか？」

と果物を持ってきた。ガイモンにしては珍しくきちんとカットされている。

「皮剥く前に持ってきてよ。どんな果物かわかんないじゃん」

「あつ！すまねエな〜お前エに植物の事教えるなんていいときながら。ま、どっちにしろこいつは俺も始めてみる果物だから！喰えるかどうかはわからねエ！！」

「そういう問題じゃないんだけどなあ・・・」

そう言いながらも、せっかくガイモンが採って来てくれたんだし、いざとなったら食中りに利く薬草もあるし（タクミが発見した）。

ということを取り敢えず喰ってみた。

「まっずっ(っ)っ!!!!」

何とか飲み込んだ。

「ガイモン！……なんだよこれ！……滅茶苦茶まずいぞ！……」

「はっはっはっは！！！！まあ見るからに不味そうだった！！！！お前がどんな顔して喰うか見てやりたくてなア！！はっはっはっは・・・」

ガイモンはまだ笑っている。ちよつとム力つく！一発殴つてやろうか？いやサバツト仕込の蹴りを．．．いや．．．殺してやろう．．．？．．．！？

なんで！？俺はこんな事ぐらい一発軽めに殴って赦してやる筈だ。
 こないたずらファミレスで究極にまずいドリンクを作成して飲ま

せる遊びと変わらない。なのに俺はこんな事で一瞬だが本気でガイモンを殺そうと決意した。明確な殺意だ・・・

ふと我に返ってガイモンを見てみるとなにやら脅えている。

「ガイモン??どした??」

努めて明るく聞いてみるが、尚も脅えた様子で、

「タクミ??・・・さっきのありや何だ????」

「さっきのアレ??」

『わけがわからないよ』・・・ふざけてる場合じゃなかった。ガイモンの脅えっぷりは少々異常だ。まさか俺が霸王色の覇気を使えるわけでもないし・・・使えるのか?

試してみようと思い、やり方が解らないので先ほどと同じようにガイモンに殺気を強く向けてみる。気絶したら後で謝ろう。

ガイモンは気絶こそしないが今にも叫び声を上げそうだ。霸王色が使えてるのか?と疑問に思っていると俺の目線が段々と上がっていき、それに合わせて体中に力が漲ってきた。腕を見ると太く毛深くなっており、立派な爪が生えている。

ガイモン愛用のかわいい鏡をガイモンのアフロの中からひったくる。
脅えるガイモンをスルーして鏡を覗き込み、・・・・一度吼えて
みた。

「ガアアオオウ!!!」

そこには一風変わった百獣の王、銀髪の獅子がいた。

悪魔の実（後書き）

タイトルの由来です。

銀髪の獅子（前書き）

主人公の今後の方針が決まります。

銀髪の獅子

”^{ソオン}動物系” ネコネコの実 モデル ”^{ライオン}獅子”

どうやらこれが俺の喰った悪魔の実の名前のようなだ。獣形態の姿からして間違い無いだろう。

俺はライオンが好きだ！むかしどっかのテレビ番組で陸上最強の生物はホッキョクグマだの何だの言っていたがそんなモン知らん！最強の陸上生物はライオン！！俺は信じている！！！！

だから喰った悪魔の実がこの実だったことはすごく嬉しいし、人獣形態の自分を見たときはかなり興奮した！でも、悪魔の実を食べてしまった事自体が問題だ。

これじゃあイカダでこの島から脱出するのはメチャクチャ危険だし、なにより海中生物の調査が釣りに限定されてしまう。

俺が酷く落ち込んでいるのを見てさっきまで脅えていたガイモンが謝りつつ慰めてくれた。こんな姿（人獣形態から戻り忘れていた）の俺を怖がらないようにしてくれるなんて・・・ちよっぴり箱が震えているけど、やっぱりガイモンはいいヤツだ。

肉食系の凶暴性を抑えて人形態に戻る。この制御はかなり気を使う。自在に操っていたルッチ、ジャブラやチャカは凄いな。俺も練習しよう。

島の脱出はおそらく出来る。俺には航海術も無いがこの身体があればおそらく「六式」が唄つ「月歩」を極めれば何とかなりそうだな。この世界は空気にプロテイン入ってるの？ってくらい鍛えればみんな強くなる。純粹に肉体が強化される動物系の悪魔の実を喰ったことだしいつか出来るようになるはず。

問題は海洋生物調査……あれ？簡単じゃね？麦わらの一味にはいいんだ……ルフィはなんたって主人公だしと海賊王になる……ゾロは海王類とか仕留められそうだし、ナミにはシキが眼をつけるほどの航海術がある。ウソップにはスゲー釣竿作ってもらえそうだし、サンジの夢は「オールブルー」半分俺の夢とかぶってるようなものだ。チョッパーにはランブルボールでの悪魔の実の可能性拡大を手伝って貰えるし、何よりチョッパーが珍獣。フランキーには「シャークサブマージ」を強化版として作っていただきたい。ブルックは……海賊は歌うんだぜ……

そしてなによりロビン……ニコ・ロビン……！好きなんです！タイブなんです……！好きなんです……！大事な事なので三段活用しました。後悔も反省もしない。早く3次元のロビンに会いたい！たぶん凄いや……！そりゃ凄いや……！何処がとは言わない。俺の6年間にかけて必ず墮とす……暴走はこれくらいにしておこう。

まあロビンと愉快的仲間たち（麦わらの一味）に入る事が出来れば俺の夢は安泰だろう。しかし、あの一味についていくには半端な覚悟ではだめだ……！よしっ幸い原作が開始してルフィがここにやってくるのは約17年後、今から鍛えてあいつらを待とう。俺は下準備

は入念にするタイプなんだ。「六式」会得を最低目標にできれば「覇気」も身につけたい。

「よーしっ！！待ってる珍獣ども！！」

＼Side ガイモン＼

とんでもない事になっちまった。地面に埋まった箱に入ってたのに全く傷んでねエ果物なんていくらなんでも怪しすぎるだろ！！まさか悪魔の実だったとは・・・アレ確か売ったら凄エ金額になったんだよな・・・そういう問題じゃねエだろ！！

俺は最低だこんなに落ち込んでるタクミに謝るか慰めてやるしかできねエ。でもやっぱりこの姿はちよつと恐エなと思っていたらタクミはちよつとだけこつちを見てから苦しそうな顔をして元の姿に戻った。どこまで優しいんだこいつは！！

俺は傍にいてやることも出来なくなつて少し離れたところでタクミの様子を見守った。暫くすると表情をいろいろ変えながらタクミはうろつろしだしたきつと悪魔の力を押さえつけるのに必死なんだ。俺のために・・・タクミが何かを叫んだ声ではっと我に返るとタクミは足をもつれさせて何度も転んでいた。

きつと身体をまともに動かすのも辛いのだろう。俺は誓った・・・タクミがこの島を出れるときが来るまで、俺は何があってもタクミの傍にいる！俺はお前の事も守るんだ！！

Side Out

「剃」って・・・やっぱいきなりは無理か地面を何度も蹴って
急加速ブルーノが言った通りにやったつもりなのに、「剃」ってえ・
・・・」

ガイモンがこっちを見てる。あんまりかつこ悪いところ見られたく
ないし、もうちょい練習して出来なかったら基礎体力からつけ治そ
う！！

銀髪の獅子（後書き）

ガイモンはいいヤツだ。

あれから18年（前書き）

修行時代はとばします。主人公とガイモンさんじゃ無理です。絶対に面白くない。

投稿を始めたばかりなのにお気に入り登録が4件もあつてとても嬉しかったです。もらった評価はやはり厳しかったんですが・・・

びしびし指導しちゃって下さい。

あれから18年

「みなさんお久しぶりです。藍沢 匠です」

・・・はあ俺は誰に向かって喋ってんだろ？麦わらの一味に加入すると勝手に決めてから18年経ちました。おかしくね？俺はガイモンさんにしか関わってないはずなんだから原作が崩れる事は無いはず。ということは原作でのガイモンさんの20年発言は約20年という事だったらしく俺は去年1年間無駄に心を躍らせ続けた。こんなことなら修行を全力で続ければよかった。

修行の結果を上げると俺の「六式」はほぼ完成した。身体作りに10年かけたかいも有り「剃」「月歩」「嵐脚」「指銃」は問題無いけど「紙絵」「鉄塊」に関しては性能のテストに限界があった。

まず「紙絵」。これはこの島で俺を除いての最速はガイモンさんのピストル。これが問題だった。この世界にはピストルよりも早い攻撃をする人間がいくらでもいる。ピストルの弾を避けられる人間もいくらでもいる。正直メチャクチャな世界だと思いが俺もこの世界で生きていく以上「紙絵」は覚えたい。俺は痛いのは嫌だ！

次に「鉄塊」。これも最初はガイモンさんのピストルで特訓しようとしたのだが「紙絵」の後に特訓を開始したのがまずかった。ビビりな俺は反射的に「紙絵」でかわした。・・・なんかごめんなさいでも理論はなんとなく解ってる。身体を鉄の高度に高める。正直これは筋肉どうこうもあるが「生命帰還」の技術も入ってると思う。

だって斬撃で皮膚が切れないんだから、皮膚も操るんでしょ？皮膚を操る感覚っていうか、操れてるのかよく解らんから髪をまずは操ってみた。・・・5年かかった（泣）「鉄塊」ってこんな複雑か？たぶん修行法を間違えたんだろう。それかセンスの問題？とにかく人獣形態の「鬣鉄塊^{たてがみ}」でピストルを防げることを確認した後、身体各部でピストルを受けきることに成功した。ちなみに全身に「鉄塊」かけて動くのは無理だった。ジャブラは本当に凄い！！まあこれも想定外の威力は当然あるから徐々に実験していきたい。

まあ「六式」の前4つは失敗してもこちらにたいした損害が出ないので完成としているだけで、まだまだ上を目指すつもりだ。ちなみに一番とくいなのは「嵐脚」！！いづれ披露したいねえ！！

あ！「覇気」は普通に無理！！理論も何も訊いてないし。どんな修行をしていいかすら解らなかった。

「月歩」で海を涉ろうのコーナーも実施されておりません。ライオンらしく持久力は皆無なように跳んでいられる時間は精々10分ほどだね！応用技の「剃刀」ともなると1分持たないしね・・・そんなこんなで最近「生命帰還」と「剃刀」の修行に集中。

スリムな人獣形態を維持しながら「剃刀」で島の外周を高速パトロール。万が一、主人公一行が通り過ぎようとしたら無理やりにでも船に乗り込む！！見た目はすっかりダンテ！髪は「生命帰還」に使いやすいように伸ばしてます。某ハンター漫画の「円」みたいなことができますよ。近距離に死角はありません。

そういえばガイモンさんはここ数年畑を始めて隠居生活。森の番人に俺が加わるようになって海賊も密猟者も激減したね。そのせいで

銃の調達にちよつと苦労したりもした。最近は料理も出来るようになった。晩飯はガイモンさん担当。16ぐらいから食後にガイモンさん特性の濁酒みたいなので晩酌している。

そんな今日この頃。

パトロール兼修行を中断し、浜辺で休憩をしていたら、

「なおつたーーーーっ!!!!」

沖合いから微かに声が聞こえた！

来た!!!ナミに警戒されたら困るので双眼鏡を持つ前に森の入り口付近に身を潜めて様子を伺う。

二隻の船は真っ直ぐにこちらに向かってくる！

俺の胸は高鳴る!!!ついに会えるんだ、俺の仲間!!!未来の海賊王に!!!!

あれから18年（後書き）

ここまで難産だった・・・次回からは一味との絡みが始まるので会話もやや増えるでしょう。

麦わらの一味”ハンター”アイザワ・タクミ(前書き)

一味に合流します。

麦わらの一味”ハンター”アイザワ・タクミ

Side
ルフィ

「孤島に着いたぞ！！・・・・・・何もねエ島だなア！！
森だけか？」

「だから言ったのに無人島だつて。仲間探すのにこんなところ来てどうすんのよ」

島の感想を言ったらナミのヤツ軽く呆れてらア。でもなんとなくい
ると思うんだけどなア新しい仲間！！それもとびつきり頼りになる
ヤツが！！！！

そしたら森の向こうから銀色の鬘をたなびかせて、でっけエライオ
ンが歩いてきた！！本能で解る！あいつはバギーんとこのライオン
とは違エ！！

Side
Out

出来る限り威厳を見せながら、俺は獣形態でルフィたちの前に姿を現す。それと同時にルフィの鋭い視線がこちらへと向けられる・・・あれ??ルフィなら面白がつて「あのライオンを仲間にする!!」とか言うのかと思っただけどなんか警戒されてる??

「ルフィ!!ライオンよ!!なんでこんな所に居るのかしら??珍しい色だし捕まえたら高く売れるんじゃない?」

ナミ・・・そりゃあないだろ(泣)ここまで金の亡者だったとは、いや冗談だと信じたい。そんな事を考えているとルフィが静かに口を開いた。

「お前・・・強えエな。なんとなく解る。」

・・・???なに??このルフィのテンション?予定と違うんだけど?このままじゃ仲間を守る為に決闘だとか言い出しかねないし、人形態に戻って話をしよう。

「君も強そうだねえ。この獅子の姿を前にして逃げるでもなく、構えるでもなくただ認めるヤツなんて初めてだ」

「・・・っ!!!??」

突然人の姿になった俺にナミは息を呑む。

「驚かせてしまつてすまないねえ。俺はアイザワ・タクミ、ネコネコの実を食べたライオン人間だ。今はこの森の番人をやらせてもらつてるよ」

「ネコネコの実のライオン人間ってアンタも悪魔の実の能力者な訳！？」

「そうだねえ動物系悪魔の実を食べた人間はその動物の力を取り込む事ができるんだ」

「あいかわらずメチャクチャだわ！悪魔の実って！まあいい所で森の番人って？」

ナミは俺の存在をそういうもんだと割り切つたようだ。適応能力高いなあ！

「ああ、この森にはたくさん珍獣が生息していてね、珍獣狙いの密猟者が後を絶たないんだ。だから俺がああで追い払つてるって訳さ」

「なるほどね」

「・・・そいつらが逃げねエ時はどうすんだ？」

ナミの疑問が解消されると先ほどまで黙っていたルフィが聞いてきた。

「もちろん力尽くでお帰りいただいてるよ？」

「ははっ！そつか。やっぱお前エ強えんだな！」

今度は間を置かずにルフィは答えた。

「それなりに鍛えてはいるよ。俺には夢があるからねえ」

「夢？？」

「ああ生まれる前から決めていた夢さ！！この世界には俺の知らない生き物がこの島の珍獣の何千倍っているんだ！！いつか信頼できる仲間と共に、俺は世界を巡って自分だけの生物図鑑を作る！！」

「・・・お前の夢、俺の船で叶えねえか？」

「!?!?!?!お前の事を俺は何にも知らないぞ?そんなおま「俺はモンキー・D・ルフィ!!海賊王になる男だ!!!!!!いいから俺の仲間になれ!!!!!!」っ!?!?」

「・・・そうかい・・・よろしく!船長!!!!!!」キャプテンハンター”ア
イザワ・タクミ!これより一味のご厄介になる」

Departure (前書き)

HY好きなんです。

お気に入りが11件に、本当にうれしいです。今日はいけるとこまでいきます。

Departure

ニヤリッ・・・計画どうり!!!

いやあ焦った!!! うまい事仲間になれたよ。なんか紳士な態度とっちゃったしこのまま押し通すか! やっぱねえルフィは守るための強さ! 夢のための強さ! この二つを認めると思ったんだよね! 警戒された時は本当にどうしようかと思ったけど、まあ何とかうまくいったね。

今はお世話になった人に挨拶に行くと言う俺にルフィとナミがついてきてガイモンと四人で馬鹿話をしている。俺がこの島にとどまるわけになった。ガイモンの悪戯の話をしていると

「タクミは珍獣のおっさんも守ってたんだな!!!」

「ブツころすぞ!!!」

というやり取りもあった。でもその後別れの挨拶をする時はルフィは笑ってた。ナミも笑ってた。

俺とガイモンは・・・やっぱり笑ってた。漫画で読んだときにはガイモンのことなんか表紙連載で樽娘と一緒に出てくるまですっかり忘れてた。でも今はガイモンのことを本当の親父だと思ってる。

名前も覚えてない元の世界の親父、名前どころか顔も覚えてないこの世界の親父、生きてんのかなあ？何となく二人とも生きてる気がする。でも、俺の親父はガイモン。これまでも、これらも。

だから、さよならは言わない弁当もって浜辺に出かけるときみに振り向かないで、でもいつもより心を込めて、

「ガイモン・・・いっできます」

「ああ・・・いっでこい、タクミ」

・・・またね・・・親父。

Side ガイモン

いつもなら昼の休憩が終わってまた訓練でも始めてる時間なのに夕

クミが畑にやってきた。後ろからついてくる二人を見てとうとうこの時が来たのだという事を悟った。

タクミが世話になった人に挨拶をしたいなんて殊勝な事を言ってきたやがったかと思えば人のことを珍獣呼ばわりしやがって、ふざけた船長の船をタクミはえらんだもんだ。おまけにタクミまで腹抱えて笑ってやがる。ライオンとのあいの子みてエなタクミのほうがよくばど珍獣だ。まあ、あれは俺のせいかな、それなのにタクミは俺を攻めなかったそれどころか俺と今まで一緒に居てくれた。

侵入者対策の罾の位置を注意したり、薬草の煎じ方なんかを紙に書いていたものを渡してくれたりと最後まで俺の世話を焼こうとしていたが伝える事がなくなったのか笑顔のまま歩き出す。

だから俺も笑顔を返す。タクミは毎朝浜辺に出かけるときみたいに自然に振り向きもしないで俺に手を振る。

「ガイモン……いっできます」

「ああ……いっでこい、タクミ」

・・・泣いてんじゃねえ・・・馬鹿息子。

Side Out

Departure (後書き)

主人公はガイモンの元でいい子ちゃんに育てなおされました。ガイモンから離れ偶には腹黒くなるかもしれませんが。

ナミとゾロと俺と（前書き）

珍獣島でずっと寝ていた漢との初対面です。

ナミとソロと俺と

ガイモンと森の中で別れ、俺は食料が無いと言うルフィの為に果物を山ほど積んでやった。・・・ナミの船に。単純な話だ、ルフィの船に積んだら沈む。

「果物だけか？肉ねエのか〜に〜く〜」

困ったヤツだ俺がこの島の動物たちを守ってきたってこと忘れてんじゃないのか？

「魚でよければ後で売れるほど釣ってやる。この島で肉が喰いたいなら俺を倒せ！！」

「・・・！？おつ俺が言いたかったのは魚肉だ魚肉！！お前と珍獣のおっさんが守ってきた島だって忘れてたわけじゃねエぞ！！・・・ほっ本当だぞ！！！！」

「嘘へたっ！！」

果物を積み終わってルフィの船に向かおうとすると

「ちょっと待つて。あんたはこっち！」

ナミに呼び止められた。

「どうしたんだい？俺が居ないと寂しいのかい？」

「・・・アンタそんなキャラだったけ？まあいいわ、そっちの船にアンタみたいなライオンが乗ってたら船は沈むわよ。あたしの船のほうがいくらかましだから、あんたはこっちに乗りなさい！」

「わかったよ」

俺はナミの船の出港を手伝う。ルフィの小船のほうではゾロがまだ寝てる。カバジとの戦闘で負ったはずの傷は大丈夫なんだろうか？少しだけ心配しながら俺たちの2隻は珍獣島を後にする。

出航して暫くして俺は航海が安定しているのを確認して、

「ところでお嬢さんのお名前は？まだ聞かせてもらってなかったと思うんだけど？」

「あら、そうねなんかいつの間にか溶け込んでたから。わたしはナミ今はそうね、雇われ航海士って所かしら？よろしくねライオンのタクミ」

「ライオンのって……まあいいやナミは一味の仲間じゃないのかい？」

「手を組んでるだけよ！わたしは海賊が嫌いなのよ！」

「あんなに楽しそうに笑ってて説得力無いなあ」

「……っ！？うるさいわねエ！！」

ナミは若干照れてるようだ（笑）あんまりからかうのはよくないのでご機嫌をとろうとしていると

「くああ……よく寝た。 てめエは誰だ？」

「ようやく起きたのかい？手負いの獣君。俺はアイザワ・タクミ。この一味に加わる事になった。よろしくな！腹あ怪我してるんだろ？診てやるつか？」

「・・・俺はロロノア・ゾロだ。この程度の怪我は何でもねェ！お前は医者か？そうは見えねェが」

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。いろんな場所にサバイバル技術として医術と料理は少し齧ってるんだよ。じゃあ良治の水はどうだい？次の目的地までひまなんだろう、付き合ってくれよ」

ゾロにはこれだ！！ガイモン特製の濁酒を掲げるとゾロは笑みを浮かべる

「いいねェ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えらんねェからな」

「見たことないお酒ね！わたしもつきあうわよ？」

「俺の親父の自慢の酒さね！たっぷり積んだんださあ呑もう！！」

それから数時間、三人からこれまでの航海のことを聞きながら呑んだ。ゾロは酒を飲むときはそれなりに陽気になるようだしナミも楽しそうだ。いい飲み友になれそうだ。

Side
ゾロ

初めてコイツを眼にした時は久々に血が騒いだ。カバジとかいう曲芸野郎なんかと戦ったが何の収穫にもならなかった。剣士としての
はるか高み、その頂点、大剣豪。俺はくいなに誓ったんだ！俺が警戒しながら声をかけたのにコイツは俺の事を手負いの獣なんてから
かったかと思えば、名を名乗りそして一味に加わったのだと俺に告
げ、治療を提案してきた。

俺も名を名乗り、治療は拒否する。正直コイツは医者には見えねエ
！刀を持つてる風でもねえのにコイツからは剣士のような獣のよう
な威圧感を感じる。だが見た目は隙だらけ。俺が困惑しているとち
よっと苦笑いしながら

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。い
ろんな場所にサバイバル技術として医術と料理は少し齧ってるンだ
よ。じゃあ良治の水はどうだい？次の目的地までひまなんだろう、
付き合ってくれよ」

なんとなく解ったコイツは警戒を解くために隙をみせ、同じ酒を飲
み交わすことで仲間になろうとしているんだ俺も警戒を解いたフリ
をして

「いいねエ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えらんねエからな」

言外に鍛錬の代わりであると伝える。コイツは鈍そうな風でもねエのに俺の言葉を素直に受け取った様に親父の自慢の酒とやらを出してきた。たいした役者だ。

ナミも交えて酒を酌み交わしはじめてどれくらい経っただろう。当初の俺の疑念は霧散し、今は俺もここから酒を楽しんでいる。様々な言葉を交わしたがタクミの言葉には嘘も裏も無い。眼を見りや解る。話を聞くにこいつから放たれる威圧感悪魔の実とタクミが習得している武術にあるようだ。凶暴性を高める悪魔の実の力をタクミは精神力で押さえ込んでいるらしい。夢のため、タクミは鋼の精神を持っているのだろう。タクミの夢なら少しぐらい手伝ってやつてもいい、仲間にいる方が面白そうだ。

でも1回くらい戦ってみてエな・・・酔った振りして1回くらい駄目かな？

Side
ルフィ

俺は酒を飲まねエから肴の干物をずっと齧りながら時々話に参加

した。三人は楽しそうに酒を飲みながら以前からの仲間のよう
に打ち解けている。それはいい、・・・でもよ

「タクミ・・・・・・・・魚肉は？」

）Side Out）

「あっ!？」

ナミとゾロと俺と（後書き）

このあとは暫く魚釣りタイムでしょうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3875ba/>

百獣の王

2012年1月10日19時56分発行